

用意があつて欲しかった。この貴重な鞍馬寺經塚遺寶にして、今少し出土の状態を明かにしたならば、如何に錦上華を添へるであらうかと思ふとき吾々は大きな遺憾を感じるのである。(本文二二頁、圖版五四葉、和裝幀入、鞍馬寺發行(未永))

●臺北帝國大學文政學部紀要 第二卷第一號

——新港文書——

一六二四年和蘭人がAnson島に占據して後、程なくその對岸臺灣本島新港社の蠻人達ほかの國の宣教師からローマ字を以て彼等の土語を寫取ることとを教へられた、一時は近隣の諸蠻社に亙つて幾つか學校が建てられ、百人を超える學生達がそこに學んでゐた。その結果として彼等は、彼等と最も交渉の多かつた支那商人との間に彼等の土語を以て賣買や土地貸借の契約の文書を遺すこととなつた。それらの多くは別に同趣旨の漢文を紙の他半面若しくは土語と隔行交互に、添へてゐるので、その文意の大様をほぼ推知することが出来る。かゝる文書の今日までに發見せられ諸種の報告によつてその存在を知られてゐるのは凡て百四十一通を算するが、最近臺北大學の村上直次郎博士は非常なる努力を以て、之が本文の蒐集に努められ、漸くその百一通を茲に本紀要の一冊として校訂出版されることになつたのである。

この文書に用ひられてゐる言葉は臺灣の一方言ではあるが、今日既に死語として新港社の部族民にさへも理解せられず、漢

文との對照によつて其意味を知りうる極少數の言葉の外には今日までに知られてゐる三種の語彙によつて判讀するの外はないその事の如何に困難なるかはおよそ想像に餘りがある。併しなからそれを明にすることは單に言語學上一新資料を加へ若しくはたゞ西洋文明東漸史の一小事實を明にするにとゞまるものではなく、一つの民族が優秀なる文明に接して生じうるあらゆる場合に就いて、唯歴史のみが爲すことの出来る貴い一つの實驗の結果を、人はそこに讀取るべきであらう。實に我々の祖先達も亦嘗て異國の僧侶によつて我々の國語を文字に寫すことを教へられ、漢文を以て彼等相互の契約書を認めたのであつた。人はこれら蠻人達の署名の下に記された略華押のいかばかり我國中世の文書に見える百姓達のそれに類似するかを見るだけでも微笑を以てこの文書を手にし得るであらう。(序文解説(英文)一五頁、文書本文一二四頁、附錄臺灣語語彙等一〇四頁、圖版一六葉、臺北帝國大學文政學部發行、丸善取扱)(柴田)